

報



會

會 岳 山 本 日

103

月 三 年 六 十 和 昭

今年の「山日記」

渡邊 公平

料を重ねるに従つて完璧に近く
なつてきつゝある「山日記」に對
して、久しく山から遠去かつてゐ
た筆者にまともな批評の出来る資
格もないが、頼まれて黙つてゐる
わけにもいかぬから一言感想やら
希望といった様なものを並べてみ
る。

最初に、多忙な仕事の片手間に
編纂の難事業を果した編者に心か
ら敬意を表し、今日の時世によく
この十一輯を生み出した苦心と努
力に謝意を表したい。

サイズが稍々大きくなつたこと
は、いろんな事情があつての事と
思ふが、是はもとの大きさが携帯
に便利ではないかと思ふ。山に在
る時だけでなく、筆者の様に常に
持ち歩いてゐる人は案外多いので
はないかと思ふからである。然し
今度は辭書用の活字を用ひてゐる
ため、小さい乍らも非常に鮮明で
ある點は、視力保護の上から云つ
ても結構である。紙質に付ては紙
で贅澤の云へない今日、これ以上
を望むは無理であらう。

紙ついでだが、寫眞は自分とし
ては雪質とか雲の種類といった教
養の資となる様なものを説明付で

使つた方が好い様に思ふ。一考を
希望したい。

日記欄、記事欄を別冊にした方
がいゝとの意見もある由だが（は
しがき）筆者はその必要もあるま
いと思ふ。記事欄は端的にいへ
ば、登山に直接必要な山のエンサ
イクロベディアの抜萃みたいなも
ので登山者の座右の銘である。考
へ方によれば毎年大體同じ記事を
讀まされるといつた憾もないでは
ないが、だからといつてその價值
の云々さるべき理由とはならな
い。

分離論の根據は知らぬが、日記
欄を別にするくらゐならば、敢て
日本山岳會から發行する必要もな
く、普通の手帳で間に合ふ。従つ
て記事欄は小百科辭典——登山教
程としてでも編輯すればそれでい
いであらうが、山に在つても街
にあつても、愛用してゐる筆者な
どには、メモにもなり座右の銘と
もなる現在の型の方が好ましく便
利な様に考へられる。

細いことを云へば「山岳遭難救
助機關」の參考資料が記事欄に加
えられたことは甚だ時機を得たも
のだが、十七頁を占めてゐるのは
この次から適當に整理すべきであ
らう。

たとへば復活した「山岳高度表」
なども其のスペースを増し、その

中に主要な峠ぐらゐは加えた方が
利用者には重寶ではなからうか。
日本の山との比較にもなるから簡
單でもいゝからヒマラヤやアルプ
ス、支那の山嶺なども加えて欲し
い。

記事欄は欲を云へばキリがない
が、「登山日程表」に樺太の山が全
然ないこと、中國や朝鮮の極めて
詳しいのに比し南アルプスが餘り
に簡に過ぎ、鋸岳が全然無視され
たり、赤石、聖に對する駿州側の
登路が省略されてゐることなども
當を得たものではない。

山岳スキーに關する諸問題、ワ
ツクスのこと等も是非欲しい記事
であり適當な編輯を望みたい。

「山小屋」欄が從來の劃一的な記
述を避けて適宜自由な説明形式を
採つたのは確かに一進歩であつて
編者の勞を高く買ひたく、登山者
を益するところ亦大であるが、「は
しがき」に案内者の年齢を將來全
部生年月日に統一するとあるのは
どうかと思ふ。年を知るには生年
月日より年齢を數字で示した方が
字數の節約にもなり、利用者にも
判り易いのではないからうか。

とまれ全卷の隅々にまで細心な
注意を以て補正の筆の入れられて
ゐることは一讀して明らかであ
り、編者の眞摯な心構へが窺はれ
るのである。「山小屋」欄に編者へ

の回答がなかつたか、或は間に合
はなかつたか菅平ヒュッテ、五千
尺旅館等の如く白紙になつてゐる
ものゝ若干あるのは遺憾だが是は
編者の罪ではなく、ヒュッテ側の
誠意の足りなさを責めたい。

目 次

- ・今年の「山日記」……………
 - ………渡邊公平……………一
 - ・テント・ビーク一九三九年……大塚武譯……………二
 - ・利根川圖志に關する調査補遺……篠田定吉……………四
 - ・「日本アルプスと氷期の水河」その他……………五
 - ………加納一郎……………五
 - ・「高山深谷」第十輯寫眞募集規定……………六
 - ・「會員の聲」に就いて……………七
 - ………冠生……………七
 - ・冬の赤石岳……………七
 - ………名須川 浩……………七
 - ・冬の報告と春の計畫……………八
 - ◇圖書紹介……………九
 - ◇會員通信・會務報告……………一二
- りゐなかつたりするのと共に氣に
なることの一つである。（狭くとも
入れ様はいくらもある）概念圖と
云へば「駒・白米」の中でアサヨ
峯がアサ日峯になつてゐるのは製
圖者の書誤りだらうが、次巻で訂
正して欲しい。

TENT PEAK

・1939・



エルンスト・グロフ

大塚 武 譯

まへがき カンチエンジュンガの北に七三六三米の高度を以て聳立するテント・ピークは、かなり前から所謂狙はれてゐた峰であるが、遂に一九三九年獨逸の精銳によつて登頂せられた。これで「完登の七千米級」が又一つ増えた譯である。本稿は、會員島田巽氏寄贈のベルリナー・ペールゼン・ツァイトウング紙掲載の一文を、東京商大山岳部の大塚君に譯してもらつたものである。(編者)

吾々三人の登山者が一九三九年再びヒマラヤに赴いたのは、單に新しい初登攀を獲ち得んがためのみではなかつた。——吾々々は全ての比較を絶した歴觀に、再び身を以て接する事の喜びに心からひたつてゐた。實際吾々の住むこの地上に於て、シッキム・ヒマラヤ程驚嘆すべき對照の烈しさを示してゐる所は、他に求められないであらう。神祕に満ちた原生林の彼方、色とりどりの牧野を越え、緑なす山々の奥には、純白の尖峰が光り輝いてゐるのである。此處は又石南花の故郷であり、四百種に餘る蘭も亦此の地に花を開く。暖い春の太陽が雪や氷を追ひやると、至る所に青春の喜びが湧き上

つてきて、實際その様は一切のものが創造者の偉大さを示すための祭典に加はるかの如くに見える。かくて吾々は、全てのこの偉大なものに再び接し、この泉から力を汲みとつて、生きがひのある生活に入る憧れを心の中に持ち續けてゐた。

一九三九年の早春、吾々は獨逸の汽船ヴェールデン・フェルス號に乗つて、カルカッタを目指して印度洋を旅して居た。この六週間の静かな航海はどんなに美しかつたことであらう。夕方になると吾々は、夢を見るやうに沈んで行く太陽を眺め、故郷のことを思ひ浮べた。然し吾々は既に新しい生活の領域に入り込んでゐるのであ

り、かくて計畫を練り直し、溢れるやうな衝動に充ちて來たのである。

吾々のこの遠征の目標は、當時尙未登の峰として残されてゐたテント・ピークであつた。シニオルチューの大膽な初登頂者であるゲットナーとヴィーンが嘗てこの山を試みたのであるが、尾根の状態が極端に危険であつた爲に、ネパール・ピークを越して少し行つた所で計畫を放棄せねばならなかつた。

ダージリンに着いて吾々は、愉快な氣持でシェルバ人と挨拶を交した。この優れた若者達は吾々を覺えてをり、輝くやうな眼指しでいろいろと話をした。

ナンガ・パルバットに於ける怖るべき不幸にも拘らず、又このやうな遠征の伴ふ困難な戦ひや窮乏にもめげず、彼等は皆喜んで吾々に従つて來てくれるのである。生命をかけた新しい團結が、明るい眼指しと力強い握手を以て結ばれた。

それから吾々は水蒸氣の多い暑苦しい原始林の中を馬に乗つて通過し、九十箇の荷物は果てしもないカラバンによつて運ばれた。この邊りの植物の生長は物凄く許りであり、又蟋蟀の喧しい鳴聲も驚く許りであつた。巨大な樹々の間

には二十種を超える大きな蝶が舞ひ、足下に深く堂々たる流れが走つてゐた。

人間の住む最後の部落であるラツチェンから先は、荷物は人間の背によつて運ばなければならぬ。熱帯の原始林も最早や消え失せて、棕櫚の木も、竹も、鈴懸の木も、纏繞植物もも早や見られなくなり、生命のあの壓倒的な横溢さも姿を消し、厚生林の種々な音も聞かれなくなつた。周りに三米を超えるシッキム百合が咲き、石南花が群落をなしてゐる中を、吾々は谷を溯つてゼムの谷の高距四八〇〇米の地點に、ベース・キヤムプを張ることが出来た。

こゝ迄來ると吾々の周圍には堂堂たる巨人の峰が聳え、就中比較を絶した形態の美しさを以て、略略七〇〇〇米の高度を持つシニオルチューの白銀の尖塔が、天に向つて錐を揉むやうに突き立つてゐるのである。一九三七年吾々は、困難な闘ひの後遂に登頂した時、如何ばかりの充實感にひたつたことであらうか！實際其の當時吾々は、吾々より一年先にこの堂々たる難攻不落の尖頂に挑んで、それを陥し入れたヴィーンやゲットナーを思ひ出さずにはゐられなかつたのである。更に吾々の前には八五七九米の高距を持つカンチエ

ンジュンガの靈峰が、壓倒的な姿態を以て聳えてゐる。それを見る時吾々は亦、パウエル・パウワールの指揮の下に強固な團結を以て二回に亘つてこの山に挑み、偉大な功績を残したあの無敵無比なドイツの開拓者達を思ひ浮べるのである。その時にも北東稜を頂近く最高點迄進んだのは、カール・ヴィーンであつた。更に眼を轉ずれば、北西には米と雪の白銀の峰テント・ピークが黒い前景の上に光り輝いてゐる。その側面は急峻に、人を拒否する如く冷然と聳えてゐる。その尾根は未だ曾て何人の足跡をも印したことなく、その頂が如何なる形を持つてゐるかに就いても何人も知る事なく、又その頂に登れるか否かさへ判らないのである。

吾々の闘ひはモンスーンとの競争でもあつた。然し五人のシェルバ人の協力を得て、十四日に互る攻撃の後ネパール・ピークへの途中、高度七〇〇〇米の所に天幕を築くことが出来た。この地點へ到達することは、吾々にとつても人夫にとつても仲々困難な闘ひであつた。エヴェレストへ行つたことのある人夫のイラは、「エヴェレストでもこれ程急ではない。こゝは全く悪い所だ」と呟いてゐる程である。

★攻撃開始

吾々はその翌日から攻撃の開始を決めた。現在ある食糧は精密に分配された。

五月二十八日 ザイル二本、アイスハーケン、カラビナ、ハンマー、コッヘル、若干の衣類、食糧

ペンジン薬品等の重いものを背負ひ、更に下衣、防風頭被の附いたウイントヤッケ、特別なシュタイグ・アイゼンを附けた靴をつけて天幕を出た。その他にも、かゝる極端に稀薄な空気の中で戦ふ爲に、糊精等の種々な固形栄養食を携帯した。

天幕を出て一時間後には吾々はネパール・ピーク（七一五三米）の頂に着いた。天気が穏かで晴れ互つてゐた。五、六分の頂に留つて遙か下方で雲塊の動くのを見てゐた。やがて立ち上つて愈々テント・ピークへの攻撃がはじまつた。吾々は幅の狭い雪庇の出た尾根を進まねばならなかつた。シュマーデラーがトップに立つてピッケルを振り、被ひかぶさつた雪庇を崩して谷底へ落した。吾々は網渡り師のやうに前進を続けた。最初の中は吾々の試みが無謀のやうにさへ思はれた。右も左も恐ろしい迄に削ぎ落ち、靴の置場所すら見當らず、この尾根自體が登れるか否か判らなかつた。然し吾々は

この障害物を越えて挑む事に決して、眞直ぐこの尾根を進んだ。八〇米程進むとこの稜に直接附いてゐる二つの大きな瘤に行き當つた。シュマーデラーはその瘤の上部を突き落し、まるで夢遊病者の様にその上に匍ひ上つた。吾々は夕方までにテント・ピークの頂を形造る山體の手の前のザツテルに着く爲に、急がねばならなかつた。

尾根の状態は其の後にもいよいよ困難を加へたが、四圍の景観は素晴らしい立派になつていつた。特にカンチエンジュンガは終始吾々を引き附けて止まなかつた。シュマーデラーは興奮して叫んだ。「アルプスには到底見られないものだ！」と。實際それは理解しがたいものであつた。最も美しいこれ等の山を繞つて、足下には五〇〇〇米から六〇〇〇米に互つて湧き立つ雲霧の波濤が横がり、尾根の上には輝く陽光をあびて吾々が居るのである。それは洵に天と地の間に於ける闊びであつた。

斯くて吾々は長い長い闊びの後、夕方になつて尾根上の一つの割れ目を見附け、薄い麻の天幕を張る事が出来た。落日がネパールの國に沈んで行くのを見たのは、その後幾度もなかつた。シュマーデラーが温いものを作り出した。今度は吾々はかゝる高所迄ペンデ

ンを持ち上げる事に成功した。天幕の中には又あの時の仲間がゐる！ 今晩は私が眞中に寝る番である。明日はシュマーデラーがその番だ。今日一日吾々は何を見たらうか！ 七〇〇〇米を超える高所で吾々が終日接したあの偉大な景観、それは終生私の脳裡を去ることはないであらう。

テント・ピークは吾々を拒むかも知れない。然し吾々は闘はう、そして闘ひ抜かう。今や吾々はヒマラヤの核心にあるのだ。

五月二十九日の朝、凍つた靴を

ピッケルでたゝいて足をはめ込む迄には長い時間がかゝつた。吾々は氷結した急斜面を登つて、約一時間半の後、愈々この山の偉大な疑問符であつた頂上を形造る隆起の下に到着した。天幕やその他のものは元の場所に置いて、唯今日中にそこへ戻れない場合を慮つて、ツダルススキー・ザックだけを持つてきたのである。天候は前日に比較して鋭い風がネパール側から吹いて、雲海は五五〇〇米の邊りに横はつてゐた。然しその外は一切が昨日の如く、筆舌に盡し難い壯觀を展開して吾々を圍んでゐた。北部シッキムの山々は相變らずはつきりと浮き立つて見えてゐた。

然し乍ら行手には尙通過出来るかどうかわからない岩塊が見え、そこ迄萬年雪の急斜面が続いてゐた。吾々は更に進んでキラ／＼光る青氷のリンネに入ると、その中には花崗岩の岩塊が拒んでゐたがシュマーデラーはピッケルを振つてホルドを刻み、それを掴んで猫の様にこの岩塊の上に出て、更に左上に登つて行つた。吾々も同じやうに氷と岩のリンネの中で、激しい闘ひに従事した。實際七二〇〇米の高所で困難な登攀を挑み続ける事は、一つの誇らかな又昂ぶつた感情をかきたてた。私は突然マッターホルンの過去の登行を思ひ出した。吾々は夢中になつて只上へ上へと登り、四十五分の後には、この最後の岩場の上に出て左上に愈々頂を成す急な斜面に踏み込んだ。上部は眞白い雪で、板状雪崩の危険もないではなかつたが、今は最早や何物も吾々の意志を屈することは出来なかつた。この斜面を乗り切ると傾斜も緩くなつて、そして最後にもう一度稍々急な所を登ると、そこが七三六三米の最高點であつたのだ。

吾々は頂に立つて何時もするやうに、しつかり手を握り合ひ、ピッケルを萬年雪に打ち込んで、こゝ迄來た事に自ら驚きの念を禁じ得なかつた。今や世界は全て吾々の足下に在つて、唯カンチエンジュンガだけが吾々より高く聳えてゐた。それは恰も過ぎ去つた闘争の日のいろ／＼な場面が、一つの未曾有し美しきをもつた繪の中に調和してゐるやうな光景であつた。北部シッキムやチベットの方面は巨大な氷河の流れも消え失せて、草原や湖が点在し羊を飼ふのに恰好な場所となつてゐる。然しネパールの方面には地上最高の峰であるエヴェレストやその姉妹峰マカルー、その外にも許多の莊大な巨人の峰が聳えてゐた。東南部には吾々の第二の故郷であるシニオルチュ、シムヴー、カンチエンジュンガが、この心昂ぶれる知人に向つて挨拶してくれてゐる。それからずつとずつと低くネパール・ギャップ氷河の上には吾々の天幕が立つてゐるのである。更にその下には吾々の忠實な人夫達がツツンパを炊いてゐることであらう。湧き立つ雲霧の海は、何百と云ふ山々を恰で島のやうに見せてゐる。そして幻想的な霧の旗がこの廣い海から立ち上つて高い山々に沿つて追ひすがつてゐるのである。その中で唯吾々だけが全てのものゝ上に忘れられたものゝ如く、靜に立つてゐるのである。この霧の海の彼方遙かの所に、吾々の故郷があり、其處には吾々の最愛の者達の生活が続けられてゐるのであ

る。朝の太陽や霽雲降臨の鐘が丁度今頃彼等の目を醒してゐるのではないだらうか、何故なら今日は丁度聖靈降臨祭の月曜日に當る日なのだから。

その夜吾々は皆高所の露營に落ち着いて睡ることも出来なかつた。恐ろしい寒い夜で、それにアイスリンネや岩に懸垂しなければ下りられないやうな下降を控えてゐたのであるから。シュマーデラーはこの夜とうとう小指を凍傷にやられて了つた。「お休み」を云つてゐる頃、吾々は皆同じ思ひを抱いてゐた。然し口に出しては語らなかつた。若し明日天候が崩れたら、そして風が尾根を叩いたら、吾々はとても戻れないだらう。」

テント・ピークの絶頂にドイツの國旗を樹てる事が出来たら、その後一ヶ月に亘つて、トウインス(七三〇〇米)、ピラミッド・ピーク(七一三二米)、ランボ・ピーク(六九〇〇米)等に登攀を試みやうと思つてゐた。だが之等全ての企ては、シッキム・ヒマラヤに特に酷く荒れ廻るモンスーンの襲來の爲に拒まれてしまつた。丁度吾々と同時にシッキムに滞在してゐたシェフラー・チベットの遠征隊も悪天候の重壓に齊しく苦しまねばならなかつた。それにも拘らず、吾々は八月十八日になつて、嵐の

中をランボ・ピーク南峰(六九〇〇米)の初登頂に成功した。然しその後吾々は益々強くなつてゆく嵐を避ける爲にネパールの禁斷國に避難しなければならなかつた。長い迂廻をしてローナック峠を踰えて再びゼムの谷に戻つて來た時、吾々はそこに平和な羊の群を見出した。ネパールの羊飼ひは、非常な辛抱を以て、原生林の中の道を羊群をつれて、迄來てゐたのである。

この旅で特に珍らしい經驗は、チベット境にある五一〇〇米のコ

利根川圖志に關する調査補遺

篠田 定吉

紹介

篠田定吉君は民俗學の熱心なる研究家である。最近赤松宗且について調査したとこので別稿を送つてくれた。以前私の本誌に發表したものの追補としてまことに結構と思ふゆゑ、その全文を左に掲げることとした。

行方沼東

利根川圖志の著者赤松宗且義知の母は吉高村の藤崎勘左衛門の妹であるが、その勘左衛門の家の分家に惣右衛門といふのがあり、これに著者の次女ふみが嫁いでゐる。この一家は後に布川に移り煙草屋をやつてゐたが、今は千葉市に居られる。

この惣右衛門の墓所に著者の兩親宗且惠夫妻の墓がある、高さ二尺五六寸のさやかな石塔である。この墓所は惣右衛門一家が移轉の後勘左衛門家が仕守りをしてゐたが、その一家もたつた一人残つた娘が十年餘り前に土地を去つてしまつたといふ。勘左衛門家の墓もちき近くにある。

吉高は今千葉縣印旛郡六合村の内の大字で、印旛沼に臨み、佐倉宗吾で知られた其兵衛の渡守をしてゐたといふ土地である。

著者は十一歳の頃から吉高村大竹の醫師前田宗現の門に入つて學んだ。それで宗且といふ名も宗現からもらつたのださうな土地の人は言つてゐる。圖志卷四の花鳥山の項にある「潮は波かたかたは薔薇の花」の句の作者梅齋はこの宗現の俳名である。この前田家は現在も同所で醫を業として居られる。

圖志にはしづみを書いて居る香取正文は今の印旛郡宗像村吉田の神主であつた。その墓碑が同地に建つてゐるが、それに依ると先祖は香取大神の神裔だと傳へられ香取郡から移つたもの。

赤松宗且惠夫妻の墓

享和元年の生れ(著者よりは五歳の年長)で幼名右内、正義と稱したが後障ることがあつて正文と改めた。學問は葛飾郡船橋の意富比神社大宮司平朝臣直利について修めた。松の屋と號し又玉松亭ともいひ、和歌の道に堪能で門人も多かつた。又

插花にも趣味をもつてゐたといふ。文久三年六十歳で没した。著者の育つた吉高の村とこの吉田とは二里餘の距離であり、従つて二人は趣味の上での知り合ひであつたのかと考へられる。

圖志卷五の卷末に香取神宮を詠つた正文の歌がのつてゐる。

赤松家の紋所を角違といふ。以前は九曜星であつたのを著者があまり圍子ばかりでみつともないといつて改めたといふ。

又同家の氏神(下總でいふこの神は屋敷神として宅地内又は地續きの山林に祀る。祭神は種々)祠は宅地内でなく布川神社の境内にある。祭神は阿須波神とあり、刻まれた年號安政七年も著者の代である。但由來は同家でもわからないといふ。



此面
赤松宗且トワリ



「日本アルプス と氷期の氷河」 その他

加納 一郎

この間から深田久彌「山の幸」、平野長英、川崎隆章「尾瀬」、茨木猪之吉「山旅の素描」、今村學郎「日本アルプスと氷期の氷河」などを讀んだ。みな立派な人々の立派な著述で、それぞれ著者なり題目なりに縁の深い方からの紹介あるひは批評があることゆゑ自分にはた讀後の所感を順序もなく述べて見たいと思ふ。感じたままを記すと勢ひ悪口になり勝ちであるが、自分はある一つの視角からこれらの本を見たので、あるひは何處か著者ならびに讀者の參考となりうるのではないかと思ふ。もしや見

當がはづれてゐたら御笑殺を願ひたい。

「尾瀬」は前々號に評が出てゐたから多くをいはないが、第一部に對しては敬意を拂はぬものは恐らくあるまい。「尾瀬の植物」などの項は、知るを誇らず、指示しておごらず、まことに自然とともに住む人の心持が筆觸によくあらはれてゐる。これに「尾瀬の科學」といふ見出しを冠せるのは、本文のためには却つて惜しまれる。第二部はかくも多くの時をこの勝景に費しえないものにとつて有難い勞作に違ひないが、かくては尾瀬を誌すに萬巻をもつてしても及ばぬのではなからうかといふ氣がする。「尾瀬」と「山旅の素描」とは特に校正者を明示してゐる點で自分の注意をひいた。この至難の業に對してその名を惜しまぬ人のあるのは山岳界として頼もしいことであり、著者の關心のほどもうかがはれてゆかしく思つた。しかしながら讀み終つた後にはいづれも未しの感か深かつた。ことに「山旅」において然りであつた。茨木氏の文章はまことによくその人の風格をあらはしてゐて、主格が轉々として漂移し、時が飛躍し、人稱がいつの間にか變つてゐるといつたやうな、余人の企て及ばぬところに、深く感懐がしのばれ、あぐら

をかいて杯を手にしてゐる氏の風姿が眼前に浮び上つてくるのである。これら破格の點を文法的に是正すべきだなどと亂暴なことを自分はいふつもりはないが、巻頭の「小諸時代」から漂然、づるく、おさまるといつた調子では著者にお氣の毒のやうな氣がしてならない。原稿通りの文字を並べることが文撰と植字の工人の仕事であつて、著者が校正に委嘱するところは決してそのやうなものではないはずである。この點は原文を重しとする古典や遺稿などとは異なることを知らねばならぬ。近頃自分の眼にふれたものでは、校正と用字に缺陷の多い書物として岩波新書の「山」をあげることが出来る。かうしたものを讀んでゐるとしまひには著者の著作態度までが疑はれて來るものであつて、果して自分のやうな寡聞のものでも、同書九一頁に「エディンバラ大學の教授であつた地質學者のグレゴリー……の著ヒストリー・オブ・ローズ」とあるのは、グラスゴウ大學の教授であつた地質學者のグレゴリーの著ザ・ストリー・オブ・ザ・ローズのことを指してゐるのではないかと氣がつく。ちよつと腰をあげて戸棚の中の一冊をとり出せばこんな誤は救はれるであらうに。その點からいへば「日本アルプスと氷期の氷河」には決してこのやうな間違はないであらう。

はじめ自分はこの本の廣告を見た時、日本アルプスには氷期以外にも氷河があつたのかも知れんと思つた。それはともかくこの標題から、著者の水も漏らさぬといつた心構へがよくうかがはれるのであつて、實際、頁を披いて行くと羊狀岩を排斥して羊群岩なる術語を主張し、または仙丈岳のやぶ澤のやぶの字に、辭典には見られない文字を特に製作せしめて用ひてゐるなど、その當否は別問題として用字上なかなか慎重な注意が行はれてゐる。鋭鋒をひつきげて容赦もなく論敵に切り込んで行く譯がけの著者にして見れば、これくらゐの用意はあたりまへのことであらう。とはいふものゝ讀んで行けば誤字もあり誤植もありで、こんなに張り切つた著作にもこれだけは免れえないかと完璧の難きをつくゝ感ぜられる。もとよりこの著者にとつては、そんなことよりも今や盛りあげられた論述の内容が至上であつて、我と思はんものは出で向へ、いざいざといつた氣構へが横溢してゐて、至るところ激しい感情の露呈が見られる。正直のところ自分は本書によつて日本アルプスの最小限度の氷河地形についてまことに判然と習

得することができて、大いに有難いと思ひ、日本アルプスに登るものゝ是非参照しておいて利するところのある書物だとは思つたが、これを日本地理學界の定説として今すぐ丸のみにすることに躊躇せられる。その理由は多くの學者との間に著しい所見の懸隔のあることが、今村氏自身によつて繰返してのべられてゐるからであつて、恐らくこれは實際以上に強調せられてゐるかの如く思はれるが、ともかく吾々専門外のものには、かやうなばげしい論調に却つて疑懼の念を抱かせられおむろに諸學者の説の歸趨するところを俟つてもおそくはないとの考をもつやうになる。それまでは一個の今村説としてこれを尊重しておくが穩當のやうである。これは今村氏としては悲しむべき或は許すべからざる見方であるかも知れないが、冷たきことのたとへにも引かざる氷と雪について、悠久幾萬年かの昔時の相を取扱ふからには、何もさう性急に功をあせらぬでもよからうと思ふ。また吾々のやうに山崎博士に聴き、大關教授の報文を讀み、小川博士の所説につき、また矢部教授の發表を見て來たものにとつて、たとひ後世これらの人々の説が誤りであつたと確定したところで、その時々

★締切 四月二十日★

- 一、季節を問はず、本會々員であるなしを問はず力作を求む
- 一、寫眞は總て自作品で未發表のものであること
- 一、寫眞の裏面に住所氏名、被寫體、撮影地等データを記入する以外一切通信文を記入せぬこと
- 一、應募寫眞は途中破損しないやう包装を嚴重にすること
- 一、大きさはキヤビネ以上四切迄なるべくは八切四切を希望
- 一、募集締切昭和十六年四月廿日
- 一、送り先 東京市芝區琴平町不二屋ビル内 日本山岳會高山深谷係宛
- 一、審査 本會高山深谷編輯委員會
- 一、使用豫定数は約百枚

- 一、採否に拘らず應募寫眞は六月末迄に書留便で返送します
- 一、採用決定の寫眞には四百字詰原稿用紙二枚以内のデータ付説明文(隨筆風のもの)をお願ひします(か御用意下さい)
- 一、お願ひ發送後二週間以内に原稿が到着しない時は、採用に決定した寫眞も取消す事があるかも知れません(但し外地應募寫眞はその餘裕がありませんから、應募と同時に説明文を同封して下さい)
- 一、發賣所 アルス
- 一、刊行期日 夏山シーズン前
- 一、採用寫眞は全部其筋の檢閲を経て使用します
- 一、採用寫眞を以て展覽會を開く豫定

高山深谷第十輯豫約募集

★新らしいカット……

五頁、七頁、八頁の新らしい

カットは坂本直行氏作。

★山岳第三十五年

◆製本代	一圓五十錢
◆書留返送料	三十三錢

★會報第五十一號——第百號

◆書留返送料 三十三錢

右の通り製本を御引受け致します。返送御希望の方は必ず返送料を御添への上御申込み下さい。

◆菊判堂々200頁・第66號愈々發賣◆
◆定價70錢(送料9錢)年極(6冊)4.10錢◆

・本邦第一流スキ一家・作家・民俗學者總執筆・

本邦ススキー盛大地域の地理的考察、國防とススキー、聽見真信氏に物を訊く一本杖の頃、モスコーの冬山の平凡な道難、山莊の閑麗、カラコムラ一九三九年ススキー短歌私願、あるスキー教師の日記、冬富士撮影の旅、雪の北信濃の行事、雪國の旅、文壇ススキー仲間、雪具考、雪國の民俗、樂詩、因信山群のスキー、春の新ススキー二つの道難、春の新ススキー案内五案、伯雪天山登山日記、雪の笠越八甲田の雪、雪の清水村、小田原の雪、雪の日記、安達太良山より岩代熱海へ、ヒマヤラ文書の素描其他十數項、表紙原色版・アト、口繪寫眞五面

山溪選書 新しきスキーの山旅 定價 送十
第二篇 全日本合同執筆四六判四三〇頁塚本閣治

田村町6—
(芝)54

[illegible]

「會員の聲」に就いて

冠 生

この會報の一端をさいて「會員の聲」と云ふ欄を設けられんことを提案する。

日本山岳會は會員が組織の實體である以上、恰くその希望、抱負を聞くことが必要であり、會としての義務でもある。故に會報を利用してその聲を聴くべきであると云ふのである。

今更こんなことを述べる必要もあるまいと云ふ人もあるかもしれないが、兎角日本山岳會は役員の山岳會だと云ふやうな非難が多い。俱樂部なら兎に角日本の山岳會なら、充分會員の意見を聴いて會の事業に善處すべきであると云ふことを近頃はよく聴くのである。

日本山岳會はこの數年の懸案であつた社團法人となつたし、全日本の山岳人を統一せんとする日本山岳聯盟の成立を見た今日、我が山岳界も時局と共に益々多忙である。それ故役員、會員相協力して會の隆昌に努力しなければならぬ。若しそれでなく日本山岳會が雲上にぼけてしまふやうなことがあれば、私等は會員に對してすまないばかりでなく、この會の生み

の親である發起人の方々に對して實に面目ないと思ふ。

私は會員の諸君に申し上げる。

どうか遠慮なく、會報を利用して忌憚なき意見を述べられんことを切望する。それは會を良くする最も緊要な効果的方法であるからである。遠慮せずに堂々と所見を述べられんことを私は鶴首して待つてゐるものである。

それにしても現代山岳人にもつと熱と力が欲しい。氣慨が欲しい。人跡未踏の境地に潜入して、身を挺して自然の神祕を握る、その勇猛心を以て山岳界の事業に當らるゝやうな人が欲しい。現代に於て最も渴望さるゝさう云ふ人が續々出現せんことを私は熱望するものである。

【編者記】編者としても豫てからこのやうな欄の必要を考へないではなかつたのですが、會報の紙面全部が會員の自由の執筆する可きものと考へてゐましたので敢てかゝる欄を設けなかつたのです。併し冠生さん以外の方からも二、三御希望の聲を聞きまですので、早速次號から設ける豫定であります。いくらこの欄が出来ましたが、いくらこの欄が出来なくても、會員方から御寄稿がなければ何もなりませんから、御賛成の上は精々御執筆の程願ひ上げます。



冬の赤石岳

名須川 浩

まへがき 北支の戦線に軍務に就かれてゐる會員名須川渡氏より「會員ではありませんが、同封の原稿は單獨行で全部贈つた點に幾分價值がある様に思つたので御送附申上げます……」との紹介文を添へて、本稿が送り届けられた。尙寫眞も二葉同封されてゐたが、編輯の都合上割愛したことを諒承されたい(編者)

昭和十六年一月一日 快晴
辰野で乗換へる。夜の明けに從ひ車窓より南、中央アルプスの雪の連嶺を望む。午前七時半伊那

大島着、幸にバスが出たので九時には落合へ着く。たま／＼舊臘二十六日、荒川岳方面で京都醫大高山部員二名が遭難し、その爲めに人夫は全部徴集され、備入れることが出来なかつたので、單獨行とさめる。上藏を過ぎて初めて小澁川の上流一杯に立塞つた赤石岳を望み勇躍、然し荷は重く谷沿ひの登り降りの多い路には頸を出し乍ら、休み休み午後三時小澁湯に着く。

一月二日 快晴

徒渉の苦痛を考へ午前十時、日昇つてから出發する。防水ズボンに履き替へる。徒渉は膝位。小澁湯から直ぐ始り、高山澤合流點の二町位上流迄の間十五回あつた。午後三時廣河原小屋に入る。

一月三日 早朝小雪後次第に快晴

午前二時起床、登頂を計畫したが雪降りの爲め滞在とあきらめ、再び寝につく。午前五時半頃雪止み天候恢復の兆あり、急ぎ支度をして七時發。歩調を早めて夏路と思はれる見當に登る。二〇〇〇米附近にて輪カンデキをはく。二四〇〇米に至つて雪益々深く登高は苦しくなつた。時間は徒に經過し二六〇〇米の急斜面の中途に至つて午後一時半。天候は快晴となつたが時間的に無理なので自重して引返すこととする。明日の爲めに

登りの足跡を良く踏み乍ら降る。夜は氣温下つたが、持參の湯タンポのお蔭で暖く睡る。

一月四日 快晴

午前二時起床、弦月既に沒して薄曇りらしく星見え。三時出發懷中電燈の光に昨日の足跡を辿りつゝ慎重に登る。次第に天晴れて満天の星を仰ぐ。西に延びた針葉樹林の尾根の爲めに夜明けも遅れ二二〇〇米に至つて漸く曉の光を見る。雪堅くアイゼンにはきかへる。昨日引返し地點を八時半に過ぎ、フナクボ(二六六〇米の平)に登りきつて眼前に赤石本峰を仰ぐ。荒川岳、大澤岳は朝陽に輝き勇躍頂上を目指す。二七〇〇米を過ぎると次第に岩氷現れ緊張する。國境尾根に達すると風は強い。惡澤岳には雪煙が舞つてゐる。小赤石の頂上近く氷の急斜面があつて少時ステップを切る。西の強風を右から受け、東側の雪庇に注意しつゝ、幾度かビッケルに支へられ乍ら風に背を向けて息を休ませた。午前十一時廿五分遂に頂上を踏む。頂上の南端に至つて聖岳を目近に望む。富士は意外に近く北、中央アルプス等の大觀は一瞥したのみで寫眞數葉を撮り直ちに下る。フナクボを過ぎると次第に雪は軟かく、アイゼンをはづしてグリスードしながら急ぎ下る。午

後三時半小屋歸着。

一月五日 快晴

荷物を取纏めて午前七時發。朝まだき凍つた河原から氷を割つての徒渉は往路とは比較にならず、切れるやうに冷い。午前十一時小湍湯を過ぎて最初の民家に至つて休ませてもらう。更に歩を延して大鹿村へ急ぐ。登頂後の気分も軽く、今日も亦快晴に恵まれて幾度か上流を振り返りつゝ黄昏迫つて落合へ着く。

(後記) 荷物の重量と容量とを出るだけ小さくすることに細心の注意を拂つた。その爲めにどうしても必要なもの以外は持参せぬことに決め、従つて砂糖、菓子、果物、茶等は勿論煙草すら之を廢した。ナイフも小型のものを運び、テルモスは湯タンポで代用し、懷爐と一緒に包んで水の氷結を防ぐ方法を探つた。

燃料(アルコール、五合)は荒川小屋へ泊ることを計畫の中に入れた爲め、持参せざるを得なかつたが、廣河原小屋附近では薪を手に入れることが出来たので、朝の出發の際時間の經濟上之を使用したので大半を餘ました。

食料、服裝、登攀用具、寢具等には特に變つたものを用ひなかつたが、徒渉に備へて防水ズボンを持参した。

以上

「學生成生登山界」 冬山の報告と春山の計畫



日本山岳會學生懇談會第二回會合は、冬山の報告と春山の計畫發表を主たる題目として、去る二月十七日(月)午後六時半より日本橋日本商工俱樂部に於て織内信彦氏司會の下に開かれ、帝、早、慶、明、立、法、日、商、農、慈、文理、中央、日醫等十三校山岳部員四十一名が出席した。茲に當日の報告並に發表の概要を記してをく。

(1) 早大

冬——新人十八名は白馬神の田圃の小舎に杉本君リーダーの下に合宿。外に宮川君リーダーの一隊は春山の偵察を兼ねて上高地を中心として活動。

次に關根君を隊長とせる十五人の一隊は、既に新聞紙上に發表せられた朝鮮冠帽峰の西北尾根

を経る新ルートを目指し、これが登頂に成功した。

荷關根君より早大山岳部の構成方針、第一線部員の意味等につき興味深い説明があつた。

春——百瀬君をリーダーとして全部員参加にて西穂高より奥穂高への山稜に極地法を展開する豫定。(期間三・二〇——四・一五)

(2) 慶應

冬——全部員關湯温泉にスキー合宿後、次代リーダー養成の目的を以て山本君以下九名は上高地より善六澤經由西穂高の稜線に天幕を進め、ジャンダルムに至る。一月三日下山。

この外八ヶ岳、御岳等に隊を出す。

春——三月の方針もリーダー養成が第一で、六、七名の隊を以て北穂高頂上直下に天幕建設の上約二週間瀧谷や潤澤を中心とした岩場を目指して、専ら技術の習練をする。

次に横尾岩小屋を根拠に約十名の別動隊も穂高に向ひ、新人は唐松小屋に一週間滞在して、冬山及びスキーの練習をする。

(3) 明大

冬——八方尾根の小屋にて約一週間をスキー合宿に過し、別に新人中心にて八ヶ岳に一隊を出す。

春——三月も新人中心にて八方尾根の合宿五日間後、白馬尻を中心として約一週間附近の山々を目指す。

(4) 立教

冬——先づ六人の一隊は十二月二十二日——一月五日早月尾根を目撃し、一月一日銀岳登頂。

鹿島槍の隊は西俣小屋より一ノ澤の頭に天幕を設け、東尾根登攀。スキー合宿は小谷温泉にて行ふ。

春——三月は銀岳西面より集中攻撃を行ひ、ブナクラ乗越より頂上、早月尾根、小窓尾根、八ツ峰、源治郎尾根等が計畫に上げられてゐる。

(5) 法政

冬——天上澤より北鎌尾根を目指したが天候の爲に取り附いたのみにて引返す。

春——三月も天上澤より北鎌尾根に向ひ、別に北海道十勝岳を中心として約一ヶ月間の隊が出る豫定。

(6) 日大

冬——スキー合宿は熊ノ湯にて行ひ五十名餘参加。其の後横尾岩小屋を根拠として一月一日——十日迄附近にて分散登山を行ふ。

春——東北飯豊山南西稜を目指し貫川より入つて同尾根の末端より天幕を進め極地法を試みる

(7) 商大

冬——例年通り全部員乗鞍岳スキー小屋に合宿。解散後穂高と槍へ各一隊を出す。

春——リーダー山田君以下十名の隊を以て鹿島槍を越えて大ゴ澤——遠見尾根に天幕を進め登攀隊二名は鹿島槍を越えて北俣を下りサボート隊は五龍東面をも目指す。別に新人は遠見小屋に合宿の上、スキー及雪山練習旁々側面より前記計畫に援助を與へる。

(8) 農大

冬——仙人尾根より銀岳を目指し折尾谷乗越にCⅤを建設せるも、時に余裕なく引返へす。

春——春の計畫も冬の連續であり、冬に達した所から更に上方へ攻撃を開始し、池ノ平を経て銀岳登頂を期す。

(9) 慈恵醫大

冬——白馬岳に於てスキー合宿を行ふ。

春——豫科のみのスキー合宿を行ひ、四月上旬奥又白馬生活前穂高を目指す。別に後立山縦走の一隊を出す。

(10) 日本醫大

冬——志賀高原に於けるスキー合宿。後、八方尾根より唐松岳へ。二月には八ヶ岳。

春——別山乗越小舎を根據として剣岳、八ツ峰、源治郎尾根を日指す。別に志賀高原にてスキー合宿の班を作る。

(11) 中央

冬——スキー合宿は黒菱スキー小屋にて行ひ唐松岳へ。十二月下旬より奥又白に入りしも、荷上げと春山の偵察に終る。

春——新人を中心として潤澤より奥穂高。別隊は奥又白に天幕を設けて前穂高を目指す。

(12) 文理大

冬——上越の白樺ヒュッテにてスキー練習。

春——三月も同様白樺ヒュッテを中心として、スキー練習を兼ねて附近の山へ。

(13) 帝大

冬——初冬谷川岳の遭難の爲め今冬は新設の乗鞍岳の小舎にて専らスキー合宿にいそむ。

春——従来の合宿形態をとらず分散的行動とし、朝日奈君をリーダーとする隊は前穂高北尾根及常念岳、山崎君をリーダーとする隊は奥又白、佐谷君をリーダーとする隊は冷澤より釣尾根に天幕を設けて鹿島槍へ、村山君をリーダーとする隊は槍平へと四隊が出される豫定。
(望月記)



圖書紹介

暴風雨

大谷東平著 岩波新書

岩波新書の一つで著者の大谷氏は中央氣象臺の技師である。

この内容は四章に分れてゐる。暴風雨と人間、風の話、颱風の話、颱風と冬の季節風の話の順になつてゐる。

てゐて、各章が更にいくつかの、又は数多くの章に分れてゐる。山に關係の深いところだけをよみたといふ人ならば、第一章と第二章だけでもよいが、全部を讀んでも決して損をしたといふ氣にならないうのみか、自然科學の通俗書でしかも興味深くよめるものとして

は同じ新書のうちでは、中谷博士の「雪」と共にその双壁であらうと思ふ。この書は全然専門外の人

が樂によめる様に苦心が拂はれてゐることが、隨所に表はれてゐる。例へば相對性の概念を與へるのに進行中の列車を出してみたり

流體力學のあるものを解くのにソーダ水のストローを使つたり、颱風を説明するのに川面の渦を用ひたりして實に手際よく滑らかに進めてゐる。この點、故寺田博士の隨筆と似通つた感じが深い。

山に關係ある點を拾つてみると先づ、風の流れが總ての天氣の決定權を持つてゐることを云ひ、次に上昇氣流と惡天候の關係をのべてゐるが、山でいつも感じてゐる現象を氣象の専門的方面から正しく判り易く而も面白く書かれてゐる。ついでその上昇氣流がどういふ場合に起るかをのべ、更に下降氣流と好天氣の間の因縁及び下降氣流がどういふ場合に起るかの話がある。

つぎに風がどういふ場合に起るかを解き、舞臺風、海陸風、風ぎの現象をのべ、いよいよ山風、谷風の説明にはいる。「風が餘り強くない日の山は、晝間は麓から頂きに吹上げ、夜は頂きから麓に吹きおろす風がある。これを谷風といひ、山風といふ。」から始まり、谷風、山風の原因の解明にはいる。

こゝをよんでゐると、いつしか過去の山歩きがいくつかわた、次々と展開して憶ひ出されてくる。

「颱風の話」になつてからは、その語源について馬琴の椿説弓張月を引用したりなどして稜々味を加へ颱風の發生、進路、進行速度、氣壓、範圍などが順を追ふ。途中に二百十日の説明があつたりして面白い。「可航半圓と危險半圓」は専門外の我々にはちよつと見當もつかないものであり、颱風中の汽船の遭難手記も山のそれとは異なつた意味で心を打たれる。

颱風のエネルギーは、その有する莫大な数字(10×10馬力)にはあきれたが、これは防災よりも一歩進んで、原動力として利用出来ないものだらうか。

「颱風の上層氣流と山岳の遭難」及び「富士山頂の暴風雨」も興味深い。「専門でない人も山登りをしてゐるやうなときに、何かのたしになることもあらうか」といふ親切心から颱風の前兆の話がある。「颱風と冬の季節風の話」は大雪、寒波、氣象特報と暴風警報で以て終つてゐる。(盛岡英治郎記)

山の幸

深田久彌著 青木書店
ノート版 三二五頁 三圓

装幀體裁はなか／＼宜敷い。深田久彌氏にとつては、「わが山々」「山岳展望」に次ぐ紀行文集であり編著を含めると山の本としては六冊目に相當する。本来の勞作の餘暇にされてゐるとみても、まづ精力家の一人であらう。

深田氏のものは、元來所謂文學者臭がなく大變讀み易い文章なのに、バラ／＼と頁をくつてみると組方も五號十三行といふ裕りのあるもので、實にさつぱりとしたいい感じだつた。

内容は「春の山」から始まり「南アルプスの一角」まで、收むところ三十三篇の大部分が通俗的紀行文であつて、しかも多分に案内記的なものを含んだ、どつちかといへばガイドブックに近いものであるやうに思はれる。著者の意圖もそこにあるらしいことは、二六八頁の次の文章からもうなづかれる。

「山の紀行文を書くたびいつも、いさゝか繁瑣に互る位地形を説明

しないといふことの人の知れぬ苦心をしてゐるつもりである。それといふのも、これを讀んで山へ来る人の爲に、いくらかなりとも道案内も兼ねたいといふ所存があるからだ。」

ところで、ガイドブックにしては五號十三行の組方は甚だ贅澤な感じがするし、和紙箱入装幀もいささか内容に對して勝ち過ぎた嫌ひがある。

卒直にいふならば、深田氏の多くの山に關する文章のうちである忠實な案内記的紀行文には私は食傷してゐる。山を熱愛する文學者としての深田さんに、われわれはもう少し高いものを期待してゐた。案内ならばこの著者に求めなくても、いくらでも書きたい連中がある。従つて深田さんには、深田さんでなければならぬ作家としての體驗を通した、もつと濃い主觀を以て描かれた山が慇懃かつたのである。

しかし忠實な點で有難いことは各章末に必要に應じて註のあることで、これらは著者の熱心さと、著作に對する眞面目な態度が、よくうかがはれて好感がもてる。殊

に「雪の清水越え」の章末に附けられた「新聞集成明治編年史」などは、私にとつて全く有難い參考文獻を教へられた。

紀行文以外にも二三の隨筆的小品がある。例へば「山の悲劇三篇」などもその一つであるが、谷川岳マツターホルン、エベレストの三例から取材した紹介とも小説ともつかぬ小品で、おそらくこれは何か新聞雜誌の類に乞はれて、制限ある紙数を氣にしながら書かれたものらしく、まつたくその概要を達者なペンによつて傳へたといふまでのものである。著者自身にしても本を書く爲のものなら、より詳しく、或はより批判的にも筆をすゝめられたであらうと思はれる。従つてその言はゞ燒き直しの文章からは、あれだけの悲劇に取材しながら、なんらの感銘をも得られない。僅に遭難者の文章を引例してゐる、あの一二行の原文の方にむしろ身に迫る感動を覺えるのであつた。そこに一應問題性がある。即ち深田氏の文章も、こゝまでくれば完全にジャアナリストイックで、何となし高いものを期待してゐる私達を失望させてしまふのである。

いつそ思ひきつて、それらの事實をテーマにして、お手のものゝ小説にでもされた方が氣が利いてゐる。いつたい登山をテーマにした小説はよく／＼難しいとみえて専門の小説家は減多に取り扱はな

いらしい。そして、反つて心臓の強いその邊の文學青年氣取りの山好きが、大變なものを書いて山岳小説だと銘打つてゐる。してみると、やつぱりかうした悲劇を小説にまで發展させないで、單なる紹介程度に止めた深田氏は、山をよく知つてゐる人の一人だと言へるのかも知れないのである。

讀後いちばん印象に残つてゐるのは「歳末の雪の旅」と「信濃追分」の二篇だつた。前者には如何にも作家らしい香韻が漂つてゐるし、後者は私の非常に好きなるところであり、また追分を愛する一群の人のありさまが、堀辰雄氏などとは別の感覺で傳へられてゐるからである。(織内信彦記)

わらち 第六號

昭和十六年一月三十日
松本高山山岳部發行
菊版一八〇頁 寫眞三葉
附圖二枚 非賣品

あれ程奥又白を熱愛した(わらち四號、五號参照)松高山山岳部のそれも目下盛に登りつゝある、若い人達によつて編まれた、大部分を奥又に割いた報告であり、一讀してつい昨春ヴァリエーション

をして驚愕させた、第二尾根の岩壁墜落といふ、悲しむべきアクシデントの總清算書であることが解る。

この部の奥又白奥壁に於る業績は、今更述べるまでもなく定評があり、また今後の活躍に關しても多くの期待をかけられてゐたもので、十四年九月以降の記録、殊に十二月の奇蹟的好時に惠まれて大量得點を擧げた、冬の行動については稀少な文獻となるわけである(第二尾根、東壁Aフェイス、三峰奥又側、四峰東南壁等)。

その輝やかしい記録の反面、頁を繰つて行く程に、一語一句純情と熱誠を以て書き綴られた九月及三月の遭難反省書に、讀者は心を暗くするであらう。それにしてもこの人達が、奥又に拂つた努力の如何に大きく、また、その收穫と犠牲の如何に貴いものであるか。

驚嘆すべきは、それらの記録の過半が、一二年の年若い部員諸君によつて爲されてゐる事である。

かつての古い登山者は、長い年月を費して一つの段階を過程し、牛のやうな歩みを以て、しかし克明に經驗を累積していつた。従つて水際立つた華やかさこそなかつたにせよ、地味で堅實な生長があつた。

最近のはかつて五年を要した段階を一年間に經過するやうな、極く壓縮された飛躍的な訓練方法がとられてゐるが、これは部の能率を向上させるといふ點で、非常に効果的な爲、どの方面でも採用されるところである。しかし何となくさういふ方法が試験前夜の一夜づけのやうな不安なものに思はれてならないのである。この學校を以て私はさうだといふのではない。

松高は優れた先輩から多くのいゝものを繼承し、われわれが數年を要する知見をば、松本といふ地の利をも加へて、殆ど理論的に觀念的に短日月で消化してしまふ、言はゞ山の天才達であつた。

私の希ふところは、かういふ行き方を誰でもが眞似をする、大變な間違ひが惹起されるのではないかといふ憂ひである。殊にそれは、學生とは生活條件の異なる實業團體のなかに、多くかうした傾向の缺陷が認められ易いのであるまいか。

十一月の報告中に雪崩に關する記事があるが、從來積雪季奥又根據地として安全と目されてゐた又白池畔も、かくして一應の危險性が識られたのであり、奥又の流行に伴れて不用意に入山する者への警鐘に相當するであらう。

極はめて嚴肅なものであり、しかも卒直に非なる點を明らかにした上、學生らしい純情と、今は亡き折井、春田、柳三君への溢るゝばかりの友情に充ちたものであつて同時に多くの示唆に富むものを提供してゐる。さまざまの意味で歴史的にも残されるべき本書が、時局柄とは言へる部限定の非賣品として、一部登山人の眼にしか觸れずには了ふことは惜しいことに思はれる。圖版は此の種既往のものより一層奥又の全貌を鮮明に表現し得てゐるものと言へやう。(織内信彦記)

會員通信

伯耆大山報告

九大旅行部、福岡高商、九州醫專山岳部合同の冬期訓練を伯耆大山に於てなせり。

昭和十四年十二月——昭和十五年一月

劍ヶ峯澤登攀

二月二七日 曇

大山寺發(午前四時)——屏風岩下デボ(七時)——劍ヶ峯澤第一瀧下(八時四十分)——小割型下(一一時三十分)——一名凍傷のため一パーテイ下降(午後二時)——一パーテイは小割壁に吊上げを行ひ、割壁上支杖に出づ。同支杖上ビウワック

(五時)

二八日 吹雪

ビパーク地出發(午前三時一〇分)——主稜(四時二〇分)——劍ヶ峯

(四時三〇分)——山頂賣店(七時一五分)——八合目より別山澤に入る(八時二五分)——大山寺着(一〇時)

元谷澤上稜線幕營

三〇日 曇

元谷澤登攀後、同稜線上に設營後下降

三一日 晴

天幕に入る。

昭和十五年一月一日 晴

天幕劍ヶ峯往復

二日 晴後吹雪

天幕出發(午前一〇時一五分)——劍ヶ峯(一〇時五〇分)——別山尾根

分岐點(午後一時三〇分)——別山第二峯(三時)——山頂賣店(四時一五分)——天幕着(五時二〇分)

三日 晴

天幕撤收、元谷澤下降

パーテイ 石橋省三(九大)、加藤秀木(高商)、田中九吉三郎(高商)、小野庸(九醫)

昭和十五年末——昭和十六年始

槍尾根經由鳥ヶ山行。

二月三〇日 晴 風強し

大山寺發(午前五時三〇分)——屏風岩下デボ(七時五〇分)——元谷澤

登攀(稜線(一〇時三〇分)——奥大山(一一時四〇分)——槍ヶ峯トラバ

ースー第二岩峯下(午後一時三〇分)——鳥越峠ビパーク(四時)

三一日 晴後曇

鳥越出發(午前八時)——鳥ヶ山第一峯三角點(一〇時四〇分)——鳥越峠に引返す(一二時)——文珠堂(四時四五分)——横手——大山寺着(七時四五分)

パーテイ 加藤秀木、田中九吉三郎、小野庸

これ等登攀に御助力賜はりし、日本山岳會會員山田光男氏、九大福岡高商スキー合宿の方々に深謝す。(九州醫專山岳部員小野庸記)

惠山鎮便り

奥野正彦

南北胎胎山縦走の爲昨二十九日當地へ参りました。四圍の山々は眞白に雪をつけて居て何か雄大なものを感じます。今度のコースは夏山でも試みた者の無い事を知り喜んで居ります。一行二名、本日より山に入ります。(昭和十五年十二月廿日)

南北胎胎山の縦走御蔭様にて更に南方將軍峯まで伸す事が出来、九日元氣一杯にて寶胎里へ下山致しました。簑と積雪とに苦しめられ乍らも兎に角末路のコースを完踏した事を喜んで居ります。(昭和十六年一月十一日 北鮮惠山鎮にて)



會務報告

二月定例理事會並二役員總會報告

二月四日(火)午後六時 於虎ノ門本會事務所

出席者 木暮、武田、冠、鳥山、茨木、黒田、西堀、中司、吉澤

角田、藤島、塚本、望月

委任十三名

一、社團法人日本山岳會役員推選の件

理事 木暮、冠、鳥山、横、西堀、關西より二名

監事 木村鐵、黒田孝

評議員 田部、茨木、藤島、松方、沼井、三田、中村、加藤

角田、額田、中司、關西より四名

幹事 吉澤、逸見、福島、早川

塚本、青木、村尾、交野、金山、谷口、横山、關西より三名

會長 木暮

副會長 横、西堀

法人許可書は一月二十二日到着目下設立登記手續中なり。

創立總會は来る二十七日(木)日本商工俱樂部に於て開催することゝす。

一、日本山岳聯盟報告

聯盟は一月二十八日を以て結成せられ、吉澤理事より経過報告ありたり。よつて本會の小委員會は解散することゝす。

理事會

一、編輯報告

「山岳」来る二月二十日頃出來上る豫定。會報二月號及び會報總目錄(自五一號至一〇〇號)も二十日頃出來の豫定にて、山岳と一緒に發送。

一、「高山深谷」刊行の件

アルス書店より發行したき旨申出あり。定價約五圓。交渉方塚本理事に一任す。

一、會員名簿作成の件

創立總會後直ちに作成の事とす

一、社團法人日本山岳會第一回役員總會 三月六日(木)の豫定。

一、左記入會申込者承認。

篠田軍治、二村喜代司、見學玄

福田庸雄、河野潤、林雄吾、松岡忠太郎、小林民雄 以上

社團法人日本山岳會

創立總會

昭和十六年二月二十七日(木)

午後六時 於日本商工俱樂部

昭和十四年度會員總會の決議に基

き、社團法人日本山岳會設立申請中の所、一月十六日附にて厚生大臣より許可ありたるに付、創立總會を左記の通り開催す。

一、藤島理事挨拶

本募會長を本總會の議長に推す。

一、本募議長挨拶

一、社團法人設立經過報告（横評議員）

一、舊日本山岳會財産繼承及會計報告（鳥山評議員）

一、理事、監事、幹事選任の件

（中司理事）

定款第十三條に依り、去る二月四日の役員總會の原案通り左記の諸氏を選挙す。

（理事） 本募理太郎、冠松次郎

鳥山悌成、横有恒、西堀榮三郎

中原繁之助、今西錦司

（監事） 木村鐵吉、黒田孝雄

（幹事） 吉澤一郎、交野武一、

福島昌夫、逸見眞雄、松井久之助、塚本繁松、村尾金二、湯淺

巖、早川義郎、前田光雄、金山

淳二、横山直介、青木昇

別に理事會及役員總會を開き評議員及會長、副會長として左記の諸氏を推挙す。

（評議員） 額田敏、沼井鐵太郎

松方三郎、田部重治、三田幸夫

加藤誠平、角田吉夫、茨木猪之

吉、中村清太郎、藤島敏男、中

司文夫、三木高峯、榎谷徹藏

（會長） 本募理太郎

（副會長） 横有恒、西堀榮三郎

次に幹事の補充二名の選舉は之を役員總會に一任することを決議す。

一、昭和十五年度（三月迄）豫算

附議の件（鳥山評議員）

一、議長閉會挨拶

議事終了後、吉田竹志、西堀榮三郎兩氏の所懷披瀝等ありて午後九時解散となる。

（出席者）

塚本繁松、鳥山悌成、横有恒、

冠松次郎、藤島敏男、中司文夫

望月達夫、北島隆、今村己之助

山根雅男、黒田孝雄、本募理太

郎、當本正義、吉澤一郎、津田

周二、寺澤一磨、交野武一、中

村謙、茨木猪之吉、石原憲治、

金山淳二、武田久吉、吉田竹志

井上皓司、早川義郎、西堀榮三

郎、横山直介 以上二十七名

昭和十六年三月三十一日 印刷納本
昭和十六年四月五日 發行

頒價 二〇錢

日本山岳會内

編輯者 塚本繁松

發行所 東京市芝區平町一（不二屋ビル）

電話（四三）一六四九

振替東京四八二九

東京市芝區深松町一丁目十三番地

印刷者 植田庄助

印刷所 成文堂印刷所

月刊山岳雜誌

山小屋

菊版八〇頁 定價四〇錢

編輯同人 石一郎、勝見勝、諏訪多榮

執筆（二月—三月）

執筆（二月—三月）

茨木猪之吉、今泉正路、高橋健治、新

島章男、山下一夫、尾崎喜八、櫻井一

衛、高如棟材、渡邊公平、津村信夫、

吉澤一郎、岩科小一郎、瀬名貞利、小

島六郎、植草彦次郎、馬渡務、福田嘉

四郎、甲賀一郎、倉方武雄、千坂正郎

甲斐伊之助、福田滋、加納一郎、稻川

榮一、船越好文、月原俊二、小島丈兒

藏田延男、由利聖一、鯨井俊子、岡野

敬次郎、赤松月船、足立源一郎、丹羽

草一、平岩米吉、八幡黎二、須田道夫

峯龍男、高橋喜平、大澤章、望月達夫

高橋文太郎、安齊徹、依田秋圃、犬飼

哲夫、若山喜志子、甲賀三郎、角田喜

久雄、神谷量平、山田奈良雄、高梨信

重、宮田恒雄（順不同）

東京・神田・神保町 朋文堂刊

ルックザツの

専門店

片相
デパート

本邦天幕製
作業之嚆矢
各學校山岳
部指定製作

東京市神田區神保町三ノ一
電話九段（三三）三二一〇